ローマ人への手紙第四回質問

３：19　私たちは知っています。律法が言うことはみな、律法の下にある者たちに対して語られているのです。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。

３：20　なぜなら、人はだれも、律法を行うことによっては神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。

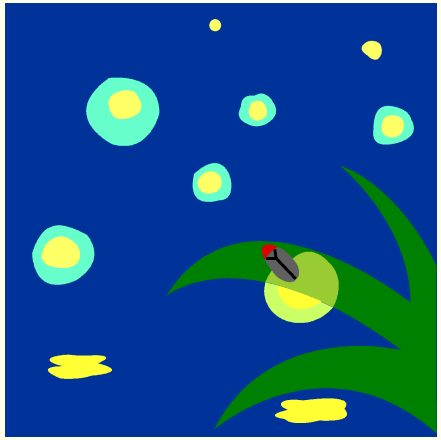
（ロマ三章一九―二〇節／新改訳２０１７）

（問一）19，20節は１章と２章のまとめとも言えます。パウロは、１章と２章で論じたことと、今この章で引用した旧約聖書のことばから、どんな結論を引き出していますか。

（問二）19節の後半で言っていることは、どのくらいの範囲に及ぶものですか。

（問三）20節からこのようなことが記してある理由がわかります。神の前に義とされるためのどんな道がふさがれていますか。

（問四）20節によると、律法にはどんな役割がありますか。



善を行えない人間の現実

（ロマ三章一九―二〇節）

どんな宗教でも、どんな道徳でも、善いことを行なうように教えます。悪いことを行なうように教えるものはないでしょう。ところで、その善いことについても、不思議なほど、世界中においてその評価は決まっています。何が善であり、何が悪であるかということは、古今東西、軌を一にしていると言っても、決して言いすぎではありません。しかしながら、ほかのあらゆる宗教、道徳と、キリスト教とが、根本的に違う点は何かと言いますと、実は人間観なのです。もちろん、神観も違いますが、宗教とだけを比較しているのではなく、道徳とも比較をするということになりますと、神観を比較するわけにはいきません。いきおい人間観を比較するということになります。

それでは、人間観のどこが違うのかと言いますと、キリスト教以外のすべての宗教（この中には、キリスト教と称しながら、その実キリスト教でない、異端も、もちろん入りますが）、すべての道徳においては、人間は善いことを知るならば、それを行なうことができるという人間観を持っています。しかしながら、聖書の教えているところは、それと全く異なります。たとい善いことを教えられても、それを行なうことができないという人間観なのです。つまり、人間を罪人と見るのです。それが、聖書全体の人間観であり、また、ローマ教会への手紙の人間観であり、きょうわたしたちが学ぼうと

しているこの個所の人間観なのです。

前にも申しましたように、神の義という問題は、聖書の中で中心的な事柄であり、この神の義は、律法という形で、わたしたち人間に示されています。ですから、人間は、この律法を行なうことによって、神の義に到達することができるはずです。ところが、人類が罪に陥って以来、だれひとりとして律法を完全に行なうことができる人はいません。ですから、パウロが「律法による義については、非難されるところのない者である」[1]と言っているとき、それは、彼が以前、律法を完全に行なっていたと言っているのではなく、律法を完全に行なおうと努力していたことが、ほかのユダヤ教徒たちから一応認められていたと言っているにすぎません。生まれながらにして律法を完全に行なうことのできる人は、ひとりもいないのです。ですから、善とは何かということを教え、正しい律法をいくら示しても、そのことによって、人はそれを行なうことができないのですから、教えるだけではだめだということになります。

ところが、多くの人々は、キリスト教についても誤った考え方を持っていて、聖書の中の良い教えを、ただ行なおうとします。たとえば、「あなたの敵を愛し」[2]なさいとか、「あなたの右の頬を打つ者があれば、もう一方をも彼に向けよ」[3]という山上の説教を読んで、心が打たれ、それを実行しようとします。しかし、それを完全に行なうことなどできないのです。聖書は、はっきりそう教えているのに、その根本的な聖書の教えを無視し、聖書の中の自分の気に入った個所だけを

つまみ食いしようとして、それができずに悩みます。

トルストイがそうでした。彼は五十歳になり、「アンナ・カレーニナ」を完成し、世界的文豪としての地位を得ましたが、心の中にはほんとうの満足がありませんでした。年にも似合わぬほどの若々しい煩悶が彼の心を捕えて、しばしば自殺の誘惑に引きずり込まれることがあるくらいでした。新約聖書をむさぼるようにして読み、ようやくそこに一筋の希望の光があるように思われました。彼は過去の文学的名声を勝ち得たすべての作品をちりあくたのごとく思い、宗教の探究に熱中し始めました。彼は名声とともに、多くの富を得たにもかかわらず、キリストの教えを学んで以来、自分の財産を貧しい人に分け与え、山林で木材を切り倒し、野で草を刈り、自分の手で靴を作り、木の皿で食事をし、敵を愛そうと努めました。しかし、彼がそうすればそうするほど、彼に期待していた人々は彼に失望し、彼は多くの友人を失わなければなりませんでした。そればかりか、あの若いころ熱烈に愛し合っていた妻さえも、彼を理解することができず、衝突し合うようになってしまいます。そうすることによって、今度はヤスナヤ・ポリヤナの預言者として、彼を慕う多くの人々が現われてきました。けれども、パウロの語った救いの福音を、倫理的欠陥を持ったものと批判したトルストイは、自ら称えたトルストイ教の矛盾に悩まなければなりませんでした。彼の主義主張に追随する多くの追従者が現われたにもかかわらず、彼は自分の言行不一致に悩まなければなりませんでした。聖書の教えているキリスト教を、単に倫理教と規定し、主イ

エス・キリストの教えを、人間はそのまま実行できるものと考えたトルストイは、ついに自分の偽善に絶望せざるをえませんでした。こうして、罪のあるままでは神のみことばを守ることができない無力な人間であることを知らなかったトルストイは、自分の力で救いを獲得しようとして得られず、煩悶のすえ家出をし、ウラル・リヤザン線の一寒村アスターボーの駅で野たれ死にしなければならなかったのです。高い霊性を激しく求めたトルストイは、自分の力で、その高い霊性に達することができるかのように思い、自分の力で倫理生活に励みました。しかしながら、生まれながらの人間が、聖書を完全に守ることなどできません。それが、聖書の人間観であり、これがキリスト教の根本的に重要な点なのです。この一点において、キリスト教は、他のあらゆる宗教、倫理・道徳とは違うのです。

それが、ここで言われていることです。「さて、わたしたちは、律法の述べていることは、律法のもとにある人々に対して言われているのだということを知っている。それは、すべての口がふさがれ、全世界が神に対して責任をとるようになるためである。というのは、律法を行なうことによっては、どんな人も神の前に義とはされないからである。それは、律法によっては、罪をほんとうによく知ることができるのだからである。」ここで、「律法」と言われていることは、聖書の教えと言いかえてもいいですから、そのように言いかえてみれば、よくわかると思います。わたしたちは、だれひとりとして、生まれながらの罪を持ったままで、聖書の教えを行な

うことなどできないのです。

だからこそ、そのように善を行なうことへの無能力者、道徳的破産者に対して、救いの道は、人間のうちにはありません。そのような者に対しては、神の怒りが臨むだけであって、神のさばきの対象以外の何ものでもありません。そういうわけですから、救いの道は、神の義[4]以外にはないのであって、それは福音の中に啓示されており、その福音こそは、「信じる人にはだれにも救いを与える神の力[5]」であって、この救う神の力としての福音以外に、わたしたちの望みはないのです。

聖書の教えは、時としてきびしいものです。ここでも「すべての口がふさがれ、全世界が神に対して責任をとるようになるためである」とか、「律法を行なうことによっては、どんな人も神の前に義とはされない」と言われていることは、きびしい教えです。しかし、これは真理です。これは、別のことばで言えば、だれひとりとして、自分の力によって、天国への階段を昇って行くことはできないということです。天国への階段というのは、天国まで、ただ続いている階段なのではありません。たとい天国まで続いていたとしても、そこを天国まで昇りつめることは、人間の力ではできないのですが、その階段は、エスカレーターのように動いている階段で、しかも降りてくるエスカレーターのように、もしもちょっとでも止っていようものなら、すぐ下へ降りて行ってしまいます。このエスカレーターが、一階から二階、三階と続いているくらいであったなら、少しばかり健脚の人であれば、エスカレーターが降りて来る速度以上のスピードで駆け上がれば、

二階や三階にまでは行くことができるでしょう。しかし、天国は二階や三階ぐらいにあるのではありません。数えきれないほど上にあるのです。しかも、このエスカレーターが下へ降りて行くというのは、人間の罪を表わしているわけであり、人間が下へ降りて来るエスカレーターに向かって、上へ昇って行こうとしても、ある所までは行けるでしょうが、その限界は無限なのではなく、結局のところ、下へ降りて行かなければならなくなってしまいます。しかも、何度それに挑戦してみても、できないということは、人間が罪のために道徳的無能力者になっていることを表わしております。

それでは、律法はわたしたちに何を示しているでしょうか。「律法によって、罪をほんとうによく知ることができる」ということです。律法の効用は、わたしたちに罪を自覚させることです。わたしたちが、自分の罪を知ることができるのは、神のことばである聖書によります。しかし、わたしたちは罪の自覚を深くすることによって、救いに入れるのではありません。罪を知ることが、救いの前提条件であるのは、論理的順序であって、必ずしも経験的順序ではありません。わたしたちは、キリストの恵みによって救われてから、自分の罪深さがわかるのであり、キリストの身代わりの贖いについても、あとからわかるというのが普通です。ですから、救われていない人が自分の罪の自覚の薄いことに悩む必要はなく、神のみもとに行けばいいのです。罪は、神の御霊によって示されなければわかるものではなく、神の御霊は、罪よりもまず救い主を示してくださり、そこから罪を示してくださいます。

そして、わたしたちが生まれ変わると、しだいに深い罪意識へと導いて行ってくださいます。罪人の現実は、自分が罪人であるということがわからず、罪の認識ができません。ですから、罪の自覚から救いに入ろうとすることはむりであり、むしろ救い主を知ることによって、自分の罪を知るようになるわけです。このことが正しく受けとめられないと、このことで悩むことになりかねず、それは、必ずしも救いに至る有益な悩みではありません。

わたしたちが自分の善行や努力によって、神に喜ばれるところまで行くことができないとすれば、わたしたちが善行を行なうことはむだなのでしょうか。そうです。キリストの恵みによって罪が赦され、義と認められ、生まれ変わるまでは、あらゆる善行はむだです。少なくとも、神のみこころにかなうことはできません。ですから、わたしたちにとって、最も大切なことは、罪が赦され、義と認められ、生まれ変わることにほかなりません。

注(1)ピリピ教会への手紙三章六節。
(2)マタイによる福音書五章四四節。
(3)同五章三九節。
(4)ローマ教会への手紙一章一七節。
(5)同書一章一六節。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より